

## 書肆 蚊雷居近藤巴太郎の活動と狂俳

——明治前期岡崎文壇の側面——

富田和子\*

### はじめに

明治前期に西三河の岡崎で狂俳点者としても活躍した書肆、蚊雷居近藤巴太郎が、明治十七年(二八八四)に刊行した『狂俳道しるべ』初編<sup>1)</sup>は、狂俳書には珍しく、俳号に本名又は通称と簡単な所在地(中には職業も)を記して「雅用風交録」の役目と、点者の選句の好みを知る参考書の役割を担い、継続発行を意図して、現在の愛知県岡崎市で出版された句集である。そして、岡崎の教育貢献者である内田不賢<sup>2)</sup>の題字やパリ万博で金賞を受賞する日本画家の久保田米僊<sup>3)</sup>の挿絵、国会議員の國嶋博<sup>4)</sup>の序を備えた豪華本として発行されたものである。本書には、東海地方の他、東京の部もあり、当時、東京にも狂俳結社があり、交流のあったことが窺えた。その後、一部増補されて明治二十一年二月に新版が発行され、発売に、名古屋の書肆、三輪清七がかかわる。つまり、岡崎で企画された出版が人気を呼び、尾張・三河・美濃の書店に販路を確保して、名古屋の書

肆、三輪清七が発売にのりだしたことが窺えた。

本稿では、巴太郎の出版人としての活動と狂俳点者・狂俳作者としての活動から、巴太郎の居所の変遷をたどり、岡崎の書肆仲間と共に三盟社(舎)を結成し、地方から東京へ向かう出版界の動向の一端を窺いたい。そして、巴太郎の狂俳句を一部紹介したい。

なお、社名は、初め「三盟社」を使い、明治十年「府県 あはせかがみ」三号には「三盟舎」で載り、同十二年「郡画改正遠江村名一覧」では併用が見られ、次第に「三盟舎」が使われるようになる。本稿では特に区別しない。

### 一 巴太郎の転居歴と出版活動

巴太郎は近藤姓を名告り、表徳号に蚊雷居・巴郎を使う。出版物の奥付に記される身分は愛知県平民で、職業は本屋(出版)であったと思われる。そして、狂俳点者としても活躍する中、狂俳書だけでなく、新聞「額田懸強記聞」(明治五年)や『古事記標註』(同七

通番	出版年月	書名	著者／編集	出版者	巴太郎の所在地と入句数	蚊居	その他の奥付・見返し記載者等
13	明9・1	浜松雑咏	宮原廉、村上博著	近藤巴太郎	遠江国敷知郡浜松寄留 三河国額田郡岡崎		額田三盟社（松原宗太郎・稲岡左橋・近藤巴太郎）。他に、浜松弘通所11軒他合計23軒
12	明8・3	愛知縣管下十大區三河國額田郡村名附區割圖（小学校書取區戸長必用）	近藤保	岡崎三盟社			見返しに「環翠堂梓」 地図1枚・色刷・31.2×41.5cm（折りたたみ15.5×7.0cm）。国会本は表紙と補強紙をつけて36×52cm、折り目を変更して折りたたみ18×11.7cm。 色刷り地図面の末尾・額田三盟社・松原宗太郎・稲岡左橋・近藤巴太郎。町名一覧（表紙・明治8年1月発兌）の左下欄外に「明治8年亥3月改」
11	明8	眠り醒、初編	彩霞楼舎雅	伊藤文造	「八丁巴郎」で3句入句		
10	明8・1	狂俳花の魁、4篇（新板）	静々舎岩城東陵編	蚊雷居	「トキワレン巴郎」で6句入句	○	明治13年4月刊、伊藤小文司（連尺町44番地）出版の再版あり。再版は序欠。
9	明治?	狂俳千とせ集、初編	巴流亭矢田一翠選	蚊雷居	岡崎八町	○	刊年記載なし。 掲載句は25「狂俳明治千とせ集」1集とは別物
8	明7・2	二十八題弁略	瑕丘宗興	永田文昌堂（京都）	参河岡崎		売捌所128店の一つ。「参河岡崎 近藤巴太郎」
7	明7・1	古事記標註、上・中・下	村上忠順注	近藤巴太郎 深見藤吉	三河国八丁邸		深見藤吉（三河国新堀町）
6	明5・10	額田懸壘記聞 第3号		深見藤吉・近藤巴太郎	額田郡八丁		深見藤吉（碧海郡新堀村）。全7丁
5	明5・9	額田懸壘記聞 第2号		深見藤吉・近藤巴太郎	額田郡八丁		深見藤吉（碧海郡新堀村）。全7丁
4	明5・6	額田懸壘記聞（ぬかたけんきょうきふ）第1号（新聞）		深見藤吉・近藤巴太郎	額田郡八丁		深見藤吉（碧海郡新堀村）。全5丁
3	幕末頃	狂俳秋風の巻（清書巻）	蚊雷居巴郎撰				「御朱料三朱也」。参考：新貨条例・明治4年5月10日に制定。明治8年6月25日貨幣条例と改称布告。（国史大辞典）雑III12
2	明4	狂俳花の魁、3編（新板）	静々舎岩城東陵	深見藤吉	「トキワレン巴郎」で3句入句		深見藤吉（三河国新堀）
1	明1夏	狂俳花の魁、2編（新板）	静々舎岩城東陵	菱屋久八郎	「桑子巴郎」で2句入句		見返しに「萬卷堂」、奥付に「開板所 菱屋久八郎（名古屋伝馬町）。明治12年2月刊、佐藤善兵衛（末広町2丁目34番屋敷）・細川小八郎（門前町4丁目27番屋敷）出版の再版あり。 見返しに「常盤連 蚊雷居校」。奥付に「開板所 深見藤吉（三河新堀）」

◎蚊雷居近藤巴太郎関係出版物

年）、『地理初歩』（同九年）、『音韻究理授業法』（同十年）などさま  
ざまなジャンルの出版を行った。そこで、調査できたところの蚊雷  
居近藤巴太郎関係出版物と巴太郎の句が入句する狂俳書を表にまと  
めた。これら出版物の奥付や狂俳書の入選句に付された地名から居

書肆 蚊雷居近藤巴太郎の活動と狂俳

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
明13・4	明13	明12・7	明12・7	明12・5	明12・3	明11・6	明11・4	明11・2	明10・7	明10・5	明10・3	明10・3	明10・3	明10・3	明9・10	明9・6	明9・4	明9・3
よしこの故能和多橋	狂俳花の魁、4篇	郡画改正遠江村名一覽	眠り醒、5編	この花集、4篇	狂俳明治千とせ集、2集	この花集、3篇	狂俳明治千とせ集、1集	眠り醒、4編	音韻究理授業法	狂俳類題花の魁、2篇	府県 あはせかがみ、5号	府県 あはせかがみ、4号	府県 あはせかがみ、3号	眠り醒、3編	地理初歩	狂俳類題花の魁、初篇	乾・坤	尾張風土歌・三河風土歌、
近藤巴太郎 編	静々舎岩城東陵 編	近藤巴太郎 編	彩霞楼令雅	静々舎岩城東陵	巴流亭矢田一翠 編	静々舎岩城東陵	巴流亭矢田一翠 編	彩霞楼令雅	小田愛之助 著	静々舎岩城東陵	日下帰一 編	日下帰一 編	日下帰一 編	彩霞楼令雅	師範学校編 文部省 刊行 三盟社翻刻 (翻刻人 近藤巴太郎)	静々舎岩城東陵 編	田中正幅 編	彩霞楼令雅
天野重助 (奥付)	蚊雷居校 (見返)・ 伊藤小文司 (奥付)	天野重助	伊藤文造	伊藤文造	伊藤文造	伊藤文造	伊藤文造	伊藤文造	近藤巴太郎	日進堂	六合社(東 京)	六合社(東 京)	六合社(東 京)	伊藤文造	稲岡左橋・ 松原宗太郎	日進堂	近藤巴太郎	伊藤文造
愛知県平民。愛知県三河国額田郡岡崎康生町54番地		愛知県三河国額田郡岡崎康生町54番地			「タカトリ 巴郎」で2句入句				愛知県平民。第11区三河国額田郡岡崎康生町54番地寄留					「カウ生丁 巴郎」で2句入句	奥付・愛知県平民。第12大区1小区遠江国敷知郡浜松紺屋町161番地寄留		愛知県管下参河額田郡岡崎	「カコ夕町 巴郎」で1句入句
	○						○			○						○		
天野重助(愛知県平民。静岡県遠江国敷智郡紺屋町84番地)	見返しに「常盤連蚊雷居校」。奥付に「出版人 伊藤小文司(愛知県平民 額田郡岡崎連尺町44番地)」	天野重助(愛知県平民。静岡県遠江国敷智郡紺屋町84番地寄留) 発兌 三盟舎。見返しに、浜松三盟社蔵 末尾に、静岡県遠江国弘通書肆24軒		売捌書林の中に額田三盟社の3名の名あり	売捌書林の中に額田三盟社の3名の名あり	売捌書林の中に額田三盟社の3名の名あり	売捌書林の中に額田三盟社の3名の名あり	掲載句は9『狂俳千とせ集』初編とは別物。 矢田一翠(愛知県平民。11区ウララ7番地)。伊藤文造(連尺町44番地)。売捌書林の中に額田三盟社の3名の名あり	売捌書林の中に額田三盟社の3名の名あり	著述人 小田愛之助(愛知県平民。第16区三河国宝飯郡蒲形村228番地)。発兌 額田三盟社 松原宗太郎・稲岡左橋。見返しに、額田三盟社蔵	日進堂(三河岡崎) 稲岡左橋	売捌所の一つに「三州額田 三盟舎」	売捌所の一つに「三州額田 三盟舎」	売捌所の一つに「三州額田 三盟舎」	見返し・明治7年8月改正	日進堂(三河岡崎) 稲岡左橋	田中正幅(愛知県管下参加茂郡孝母) 他に『啓蒙尾参風土歌』の書名でも出版。	

通番	出版年月	書名	著者／編集	出版者	巴太郎の所在地と入句数	居序	蚊雷	その他の奥付・見返し記載者等
50	明20・10	文字絵指南	佐藤茂佐	三野重助 三野重助 三野重助 他				三野重助(東京府日本橋浜松町3丁目1番地寄留) 三野重助(三河国豊橋本町)
49	明20・10	新撰滑稽 奇言なをし	近藤巴太郎 編	天野重助 三野重助	愛知県平民。愛知県名古屋区南桑名町3丁目27番地寄留	○		天野重助(東京府日本橋浜松町3丁目1番地寄留) 三野重助(三河国豊橋本町)
48	明19・11	狂俳ひさかた集、初編 (無岡舎月次)	木村専蔵編(岡崎)	中村むら (岡崎)	序に「会員 蚊雷居巴郎」、社員「巴郎」で7句(のべ9句)入句	○		木村専蔵(額田郡岡崎久右衛門56番邸寄留)・中村むら(額田郡岡崎伝馬町1番邸寄留)。 撰者・南枝亭一花・美橋庵愛川・撫松軒一青・常盤堂冷翠・涼川居其風・梅香楼延山・三廻家山頂・清潤表扇花・梅山居馨・巴流亭一翠(10名)
47	明19・7	小学指教図	文部省 編	天野重助				出版人・天野重助(愛知県下三河国渥美郡豊橋本町十五番邸寄留)・豊橋・三野重助
46	明19・2	みをつくし、3編	麗々處可水撰、加藤平一 編	須廣治	「ヲカザキ 巴郎」で1句入句			
45	明18・3	狂俳水の音、34編 (水音舎月次集)	梶原竹哉	梶原竹哉	「三ヲカザキ 巴郎」1句入句			梶原竹哉(名古屋市宮町1丁目乙1番邸)
44	明18・1	狂俳新報、初編	近藤巴太郎 編	名古屋 狂俳新報舎	愛知県三河国額田郡岡崎康生町39番邸平民			出版人・藤井廣治(愛知県尾張国名古屋区旅籠町128番邸平民)
43	明17・12	狂俳道しるべ、初編	近藤巴太郎 選	文錦堂 蔵版	愛知県三河国額田郡岡崎康生町39番邸平民	凡例		見返しに、文錦堂蔵版 不賢揮毫・米徳画・國嶋博序
42	明17・3	狂俳花くらべ	近藤巴太郎 編	近藤巴太郎	愛知県平民。三河国額田郡岡崎康生町39番邸	○		撰者は涼川居・酒廼家・逸月亭・晴暉亭・蚊雷居・梅山居・常盤堂・一旭軒・湖月亭他。 4回分を合冊か?各10評と第二回角力集の引札・番付表(3枚)
41	明16・9	狂俳花の魁、7篇	静々舎岩城東陵 編	近藤巴太郎	愛知県平民。額田郡岡崎康生町39番邸	○		見返しに、蚊雷居蔵版
40	明15・5	狂俳明治千とせ集、4集	巴流亭矢田一翠 編	伊藤文造	「ヲカザキ 巴郎」で4句入句			岩城玄庵(同県平民。三河国額田郡津村63番邸) 矢田一翠(愛知県平民。額田郡岡崎裏町7番地)。伊藤文造(連尺町44番地)
39	明15・5	この腸多留、2編	近藤巴太郎 編	稲岡左橋	愛知県平民。額田郡岡崎康生町39番邸	○		稲岡左橋(土族。額田郡岡崎連尺町99番邸) 見返しに、製本 三河 日進堂
38	明15・4	狂俳和歌菜籠、初編	晴暉亭野鶴	伊藤小文心	「ヲカザキ 巴郎」で2句入句	○		不賢序。編集人 野々山利吉(愛知県平民。額田郡康生町46番邸)
37	明15・1	狂俳初会相撲	蚊雷居・晴暉亭	勸進元・誠心				番付表
36	明14・4	狂俳類題花の魁、6篇	静々舎岩城東陵	日進堂		○		日進堂(三河岡崎) 稲岡左橋
35	明13・8	眠り醒、6編	彩霞楼令雅	伊藤文造				売捌書林の中に額田三盟社の3名の名あり
34	明13・7	この花集、5篇	静々舎岩城東陵	伊藤文造				
33	明13・4	狂俳故能腸多留、初編	近藤巴太郎 編	稲岡左橋	三河国額田郡岡崎康生町平民	○		稲岡左橋(土族。額田郡岡崎連尺町)。見返しに、製本 三河 日進堂 奥付が松屋矢野平兵衛版も残る。



通番	出版年月	書名	著者／編集	出版者	巴太郎の所在地と入句数	蚊雷居序	その他の奥付・見返し記載者等
65	明25・5	清警冠句桑弧集、10編	桑弧社 寺田左門治	桑弧社 寺田左門治	12丁目「三河第一支部長 居巴郎評。三河 巴郎」で1句入句		奥付は7編と同じ。撰者の一人
66	明25・9	清警冠句桑弧集、11編	桑弧社 寺田左門治	桑弧社 寺田左門治	11丁目「三河第一支部長 居巴郎評。三河 巴郎」で1句入句		寺田左門治（東京浅草区旅籠町1丁目6番地。桑弧社仮事務所）。定価6銭。撰者の一人
67	明26・1	清警冠句桑弧集、12編	桑弧社 寺田左門治	桑弧社 寺田左門治	13丁目「三河第一支部長 居巴郎評」		奥付は11編と同じ。撰者の一人
68	明26・5	清警冠句桑弧集、13編	桑弧社 寺田左門治	桑弧社 寺田左門治	13丁目「三河第一支部長 居巴郎評」		奥付は11編と同じ。撰者の一人
69	明28・12	清警冠句追薦集	寺田左門治 編	寺田左門司	37丁目「三河一部優老 蚊雷居 居巴郎評」		寺田左門治（麹町区3番町14番地）。非売品。撰者の一人

翻刻・3 狂俳秋風の巻（清書巻）…鈴木勝志『雑俳集成』3期12「幕末明治狂俳点帖」H11

16 狂俳類題花の魁、初篇…『新編岡崎市史』13「近世学芸」S59

25 狂俳明治千とせ集、1集…『新編岡崎市史』13「近世学芸」S59

32 よしこの故能和多橋・菊池真一（翻）『街道物都々逸研究』甲南国文57 H22

43・51 狂俳道しるべ、初編・富田和子「翻刻『狂俳道しるべ』初編とその紹介（一）」「同（二）」社会とマネジメント（相山女学園大学現代マネジメント学部）5-2、6-1 H20

所の変遷をたどり、三盟社との関わりについて検証する。

まず、表から巴太郎の転居歴と出版活動を見ていくと、明治元年夏には桑子（矢作川右岸の自然堤防上に立地。新堀村の西側。現在、岡崎市大和町）に住み、同五年六月までに額田郡八丁（現在、岡崎市八帖町辺り）に移ることが窺える。

この間に出版したものは、同四年の『狂俳花の魁』（新板）三編と、翌年の「額田懸壺記聞」である。この「額田懸壺記聞」は岡崎で発行された三河で最初の新聞であり、確認できるものは第三号までであるが、第二号、第三号によれば、弘通所（販売所）が額田県下十軒、名古屋二軒、東京一軒、管下物産会社に置かれた。そして、深見藤吉とともに奥付で額田懸壺記聞本局と称しており、出版者としての意気込みが感じられる。この深見とは同七年「古事記標

註』まで組んでいたことが窺える。

その後、同年京都で発行された『二十八題弁略』では、全国の売捌所百二十八店の一つとして東京の須原屋茂兵衛や名古屋の永楽屋東四郎らと並んで名を連ね、『狂俳千とせ集』初編や翌年『狂俳花の魁』四篇（新板）を単独で刊行する。

更に、同八年には松原宗太郎・稲岡左橋と組んで額田三盟社と称し、折本仕立てで携帯性のあるきれいな色刷りの地図「愛知縣管下十大區三河國額田郡村名附區割圖」を刊行した。これには所在地の記載はないが、翌年の『浜松雑詠』の奥付から同九年一月までには浜松に寄留することが窺える。額田三盟社については次項で触れた

い。同九年六月刊の『狂俳類題花の魁』初篇序に「その出版祝報を日進

堂が発兌にまかせ、七十五里の灘ちかき浜松、三盟社に拙筆とするものは、亜細亜人種 蚊雷居巴太郎」とあることから、浜松への転居はおそらく出版の仕事の關係であつたろう。

なお、日進堂は額田三盟社の仲間で八幡町（現在、岡崎市六供町の一部）の稲岡左橋のことである。巴太郎は狂俳書の出版を前年の『狂俳花の魁』（新版）四編まで手がけていたが、浜松にいたため日進堂に任せたとと思われる。

さて、巴太郎は、同九年三月までには浜松から籠田町（岡崎市）に戻り、再び十月までには浜松紺屋町一九一九番地寄留となる。そして、翌十年三月までには康生町、おそらく七月刊『音韻究理授業法』奥付から岡崎康生町五十四番地（現在、岡崎市康生通東二丁目十八。岡崎信用金庫中央支店の辺り）に寄留し、同十二年三月までに「タカトリ」（現在の高浜市、旧、高浜町高取（平成四年廃止の名称）のことか）に移住。更に七月までには岡崎康生町五十四番地に戻る。以後、狂俳書の編集や序を書くことが多くなる。

なお、巴太郎は、『狂俳新報』初編（明治十八年）の中で「狂俳の鼻祖三州碧海郡高浜村故人桃花亭於高居士の遺伝は二編に編纂すべし」と書いている。もしかしたら高取に滞在し、桃花亭於高の調査を行ったのかもしれない。どのようにまとめたのか、読んでみたものである。

その後、同十五年五月までには岡崎康生町三十九番邸（現在、岡崎市本町通一丁目四。五万石藤見屋（和菓子屋）がある）に移住。この隣町である連尺町の、居宅から徒歩で二、三分の場所に有名な伊藤小文司（環翠堂 本文書店）<sup>7)</sup>や卓池系俳人植田石芝（呉服太物商の大賀屋）がいた。

この間に発行した『狂俳故能腸多留』初編（明治十三年）序に、

浜松かぜの音つれも絶て多年の休俳にいつかハ抜句も紙魚の巢や鼠の寝処となりたるを日進堂のすゝめにまかせかしこを拾ひこゝをとり……。

とあることから、おそらく明治元年夏までには狂俳の句作を始め、同四年までには狂俳結社の常盤連に所属したものの、おそらく明治九年頃から同十二年頃までは浜松とタカトリへの出張・転勤があり、本屋（出版）の仕事が忙しく、依頼されて狂俳書に序を寄せる程度で、狂俳書の出版は仲間任せにしていたようである。

同十三年『狂俳花の魁』四編頃から狂俳書の出版に復帰するが、同二十年十月の『滑稽奇言なをし』<sup>8)</sup>では名古屋区南桑名町三丁目二十七番地（現在、名古屋市中区栄二丁目的一部。名古屋商工会議所周辺）寄留。この寄留もおそらく出版の仕事の關係であつたろう。漸く翌二十一年二月までには岡崎康生町三十九番邸に戻ったことが窺える。

このように出版の仕事の關係で転居が多くなったようである。

## 二 巴太郎と三盟社

先に見たように、巴太郎が松原宗太郎・稲岡左橋と組んできたと思われる三盟社、額田三盟社の社名は、明治八年の地図「愛知縣管下十大區三河國額田郡村名附區割圖」から見える。

この中の松原宗太郎は、明治七年の『新撰字解』（再版）・『神判記実』二編、翌年の『訓蒙 国史集覽』で売捌所の中におり、稲岡左橋（日進堂）も『新撰字解』（再版）・『訓蒙 国史集覽』で売捌所の中におり。つまり、彼らは当時既に本屋として活動しており、明治八年には額田三盟社として活動を始めたようである。今のところ

る、巴太郎たちがどのような経緯で額田三盟社と称することになったのかははっきりしない。

その後、額田三盟社は明治九年に『浜松雑詠』・『地理初歩』を、翌年『音韻究理授業法』を発行し、同年、東京の六合社刊『府県あはせかがみ』の売捌所の一つに尾張の永栗屋東四郎と並んで『三州額田 三盟舎』で名を連ねる。しかし、翌年の『狂俳明治千とせ集』一集では、額田三盟社としてではなく、三名は個々の名で売捌所に名を連ねている。おそらく県内を意識した出版物では個々の名を載せたものではなからうか。

更に、明治十二年の『郡画改正遠江村名一覧』は、巴太郎編、発兌 三盟舎で、柱刻は「三盟舎蔵版」ではあるものの、見返しに、浜松三盟社蔵とある。前年の『浜松雑詠』の著者の一人である宮原廉は岡崎の人であるが、その奥付に浜松弘通所十一軒を中心として静岡県内の弘通所が列挙され、愛知県よりも静岡県内への販売を意識していたことが窺えた。先に見たとおり、巴太郎も明治九年頃、浜松出張・転勤をくりかえしていた。つまり、三盟社はこの頃までに浜松にも拠点をおいたものと思われる。

そして、『郡画改正遠江村名一覧』の奥付に載る出版人は天野重助で、静岡県遠江国敷智郡紺屋町八十四番地寄留とある。敷智郡は、現在の浜名郡、浜松市中央部・東部・西部、湖西市（南部を除く）、引佐郡二ヶ日町にあたる地域である。翌年の巴太郎編『よしの故能和多橋』も天野重助が出版人である。

ところで、文部省編『小学指教図』は各地で出版されたが、明治十九年刊の奥付に「愛知県平民 天野重助 愛知県下三河国渥美郡豊橋本町十五番邸寄留」とあるものが残る。つまり、天野重助の本籍は浜松ではなく愛知県であり、豊橋寄留とあることから豊橋で

もないことが窺える。そして、翌年の『新撰滑稽奇言なをし』・『文字絵指南』では、天野重助は東京府日本橋浜松町三丁目一番地寄留となるが、発兌所 三盟舎の住所は三河国豊橋本町で、明治二十二年の『珍説阿房多羅経』では天野重助は麴町区富士見町一丁目十七番地、三盟舎の住所も麴町区富士見町一丁目十七番地に移っている。更に、三年後の『美音必吟』以後、巴太郎と三盟舎の関わりは見られなくなる。

つまり、三盟社の経営は天野重助に移り、そして、おそらく三盟舎は、明治前期という時代の潮流の中で西三河の岡崎から豊橋、浜松、更には東京に進出したものと思われる。その後、文学作品を中心に『大学・中庸・四書講義』(昭和三年刊)まで確認できるので、東京で少なくとも昭和三年までは続いたようである。

一方、巴太郎は、三盟社の経営を天野重助に任せた後、岡崎に戻り、狂俳書の編集・出版に重点を置いて、狂俳点者として活動したのではなからうか。

### 三 巴太郎と狂俳

巴太郎が漸く狂俳書の編集・出版にかかわるのは明治十三年の『狂俳花の魁』四篇・『狂俳故能腸多留』初編からで、同十七年にははじめに紹介した「雅用風交録」をめざした豪華本の『狂俳道しるべ』初編の出版や、『狂俳花くらべ』では名古屋の水音社の涼川居・酒道家・逸月亭・晴暉亭らとともに活動する様子が窺える。しかし、明治十八年の水音社月次集『狂水の音』三十四編に、「三ツカザキ 巴郎」で一句入句するものの、その後は『狂水の音』への入句が見られない。

この水音社は、明治十五年五月に『狂水の音』初編を発行し、名古屋の狂俳活動の中心的存在であったが、同十八年頃、何か混乱があり、その後継を名のる清原社によって、同二十一年十月に『俳諧清原集』（松屋書店発行）が創刊したことは、既に別稿で述べた。<sup>13</sup>『狂俳新報』初編（明治十八年）は名古屋を中心に岡崎に支部をおいて新しい雑誌を作ろうとしたものであったが、巴太郎はこういった採め事を嫌ったのかもしれない。

その後、同二十二年以後は、東京の桑弧社とかかわりを持つようになる。同年十二月に東京の桑弧社が発行する『清警桑弧集』二編に「三河 巴郎」で入句し、その後、同四編には客員として点者の一人として載り、同五編（同二十三年六月）から少なくとも同十三編（同二十六年五月）まで「三河第一支部長 蚊雷居巴郎評」と載る。このことから桑弧社に加入し、三河第一支部長に就いていたことが窺える。そして、同二十八年十二月では点者としての肩書きが「三河一部優老」に変わっている。これは三河第一支部の年長者と解せるので、これまでに支部長を退任したのではなからうか。

次に、巴太郎の句をいくつか例示したい。下段の書名に付した番号は、表の通番。濁点は原文にあるものと私意に付したものとを区別していない。適宜、※以下に簡単な語釈を記す。

まず、最初に見られるのは次の二句。  
長閑な堤 本艸しらべる塾連れる 1 『狂俳花の魁』二編  
白玉椿 護摩木佇す庭不浄忌ム 同

次に、学問・技芸の類に取材した句。  
窓叩く蛇 机上の夢に周公見る 2 『狂俳花の魁』三編

※周公||人名。姓は姬(き)、名は旦(たん)。文王の子で武王の弟。武王の子の成王を助けて、礼楽・制度を定め周王朝の基礎を築いた聖人。孔子が

理想とした。(新選漢和辞典(5)版)  
肌寒ヒヤヤカ 英の寄留エイキリウへ学費ガクヒつく

かゞやく月 岳陽楼ガクヤウに普茶フチヤたしむ 38 『狂俳和歌菜籠』初編

※岳陽楼||岳陽市の城壁の西門楼。唐の開元年間、岳州府長官の張説が才士たちと楼に登って作った詩や杜甫の詩などによって、洞庭湖眺望の絶景地として有名。(デジタル大辞泉)

景文の雲雀 早い麦の穂生けて有る 55 『清警桑弧集』四編

※景文||松村景文(一七七九〜一八四三)江戸後期の四条派画家。京都の人。松村月溪(呉春)の異母弟。優麗な花鳥画を得意とした。「紫雲英雲

雀図」他。

○食を楽しむ句

詩曆張シレキた聯レン

わつさり 来た海苔醬画友カイヒシヤガユからな 10 『狂俳花の魁』四編

※錦木||料理名。「京都で」上等のかつおぶしを、せいぜい薄く削り、わざ

びのよいのをネットになるよう、細かく密におろし、思いのほか、たくさんに添えて出す。で、これが食い方は、両方適宜に自分の皿に取り、ざんぐりと箸の先で混ぜて醬油を適量にかけ、それを炊きたての御飯の上に載せて、口に放り込めばよいのである。(中略)錦木と称するのは、削ったかつおぶしの片々を、木の錦木のへらへらになぞらえたものにほかならないと思う。「北大路魯山人著 平野正章編『魯山人味道』「夏日小味」(昭和六年)KK東京書房社 昭五十三年)

※伊丹||伊丹酒のこと。江戸時代から最上酒とされた。

夏好みの寮 爛ナつけて鶴の手柄待ツ 56 『清警桑弧集』五編

溪の梅 牛に揺られた酒なるい 60 『清警桑弧集』六編

○明治の時代を感じる句。  
わたる小鳥 伝信機張る波上計る 10 『狂俳花の魁』四編

薫る風 川底汽車の弁利反る 14 『眠り醒』二編  
 込合ふ渡船 咄しア未曾有の博覧な 27 『狂明治千とせ集』二集  
 雪の遠山 海峽へ銚の惱ミ浮く 同  
 鼻をそろへ 年とる伊豆にかゝつとる 42 『狂花くらべ』  
 姉囀に福 免許産婆の札懸る 46 『みをつくし』三編

※江戸時代の「取り上げ婆（ばば）」が一八七四年（明治七）の医制で「産婆」と名づけられ、九九年に制定された産婆規則によって全国的に身分資格の統一がなされた。（『助産師』日本大百科全書（ニッポニカ）より）

出揃ふ稲穂 昔の札幌と違ふ 56 『清警』桑弧集』五編  
 嬉し泣 勲章かけた兄に逢ふ 61 『清警』桑弧集』七編  
 祝杯 養志御賜の筵開く 65 『清警』桑弧集』十編

○人情を感じる句。

迷わく千方 おぼれるとコク泣上戸な 10 『狂俳花の魁』四編  
 肌寒き夕 鐘に帰俗の籠相くやむ 同  
 仏庄七 はぐれて二度鞍馬見る 同  
 情無い思案 去つて見受の年恥ぬ 18 『眠り醒』三編  
 納豆汁 茶筌戻つて法衣脱ぐ 40 『狂明治千とせ集』四集

※茶筌＝茶筌髪のことか。未亡人などの髪の結い方から、ここでは未亡人のことか。

○生活句・叙景句。

細るともし火 空気の盈る金穴戻る 18 『眠り醒』三編  
 寝覚めの千鳥 障子隣りも旅硯磨る 52 『清警』桑弧集』二編  
 こよひの月 波で洗つた筆が良い 56 『清警』桑弧集』五編  
 集く虫の音 咽た粉葉白湯に浮く 同  
 杉形りに積む俵 運も運じゃが腹もよい 62 『清警』桑弧集』八編  
 腕によりかけ 踊る子よりも踊つとる 同

暁の鐘 瑞相誉めて雪振ふ 同  
 むつとして 金箔師人笑はせぬ 同

まとめ

本稿は、明治時代前期に狂俳と出版にかかわった巴太郎とその周辺の人たちの活動を探ることから、岡崎文壇を支えた一側面を窺ったものである。巴太郎はこの時代の潮流の中で、他の出版者と組んで三河で最初の新聞を創刊したり、西三河の岡崎から豊橋、浜松、更には東京に進出する三盟舎とかかわりを持った。そして「雅用風交録」をめざした豪華本の『狂俳道しるべ』初編を発行したり、新しい狂俳雑誌を作ろうとしたりした。岡崎康生町三十九番邸に居住した時は、有名な伊藤小文司（環翠堂 本文書店）や卓池系俳人植田石芝の近所で、影響を受けたであろうことは間違いないであろう。

晩年には、当時、混乱していた名古屋の水音社ではなく、東京の桑弧社とかかわり、三河第一支部長を務めるほどに狂俳を愛好した。選ばれた句は点者の好みもあるうが、文明開化の息吹を感じるものもあれば、文学好きであることや美食家の一面を感じるものもあった。

巴太郎については、まだ不明な点も多いが、今後の課題としてい。

注

(1) 『狂俳道しるべ』初編は、「翻刻『狂俳道しるべ』初編とその紹介

(1)・「同(2)」(「社会とマネジメント」第五巻第二号・第六巻第一号 椛山女学園大学現代マネジメント学部発行 平成二十年)で紹介した。

(2) **内田不賢** 一八三三〜一九一〇 幕末から明治期の書家。天保四年(一八三三)江戸京橋に生まれる。幼名和介。八歳にして新潟生まれの書家菱湖入門。弘化元年(一八四四)高崎鼎仙に漢学を学ぶ。翌年父母と岡崎に帰り、嘉永二年(一八四九)習字の塾を開き、中正にして穏健な書体で世人の信望を得る。『初等小学習字帖』六冊(明治十六年)、『図解書法いとぐち』(同二十六年)、『環翠用文大成』(同二十七年)、『雅俗往復用文章』等をあらわし、明治初期における岡崎の教育の貢献者とされる。また、幟書きの名人としても知られ、明治九年(一八七六)に書かれた幡豆郡一色の大提灯祭諏訪神社の幟は不賢の書。同二十三年夏山村八幡宮祠官、乙見村稻荷神社祠官兼務。同四十三年三月一日没、享年七十七歳。墓は岡崎市伊賀町明願寺にある。『新編岡崎市史総集編』平成五年刊より)

(3) **久保田米僊** 生年・嘉永五・二・二十五(一八五二・三・十五)。没年・明治三十九・五・十九(一九〇六) 明治期の日本画家。京都生まれ。名は寛、幼名米吉。慶応三年(一八六七)鈴木百年に師事し、維新後、京都画壇の興隆をめざして明治十一年(一八七八)画学校の設立を建議した。師風を継ぐ雄渾な画風で知られ、内国絵画共進会、内国勸業博覧会で受賞を重ねる。また二十二年パリ万博で金賞を受賞し渡仏して『京都日報』に寄稿。二十四年には上京して『国民新聞』に入社し、二十六年のシカゴ万博、二十七年日清戦争従軍の記事を報じた。『米僊漫遊画譜』『米僊画談』などの著書があるが、三十三年に失明。以後は俳句や評論活動を行った。(佐藤道信)(コトバンク『朝日日本歴史人物事典』(株)朝日新聞出版)

(4) **国島博** 一八五二〜一九〇七 自由民権家、代議士。嘉永五年(一八五二)十月二十八日生まれ、士族。中央の自由党が結成され

る前の明治十四年(一八八一)四月に作られた愛知自由党の岡崎懇親会に参加した。当時の住所は名古屋区東角町であったが、その後岡崎伝馬町に住み、岡崎の民権家としても活動し、同十五年三月に創立された三陽自由党主事となる。しばしば政談演説会を開くほか、同十六年九月の自由党幹部星亨の東海遊説に際しては岡崎の党员を代表して案内したり、翌十七年四月の自由党理論家植木枝盛の来岡に際しては、岡崎の自由党員の代表の一人として迎えている。

同二十一年一月名古屋区会議員。同二十三年の国会開設後の第一回衆議院選挙では愛知県第一区(名古屋市)から自由党候補として出馬したが、吏党派大成会の堀部勝四郎に敗れた。明治二十五年四月名古屋区会議員に再選され、さらに同二十七年三月一日の第三回総選挙では当選した。しかし同年六月二日に議会在解散し、九月の第四回総選挙では再び落選したために国会議員としてはわずかに三か月で終わった。その間、明治二十五年代言人となり、同年新愛知新聞社長。明治四十年(一九〇七)六月十六日没。『新編岡崎市史総集編』平成五年刊より)

(5) 蓬左文庫尾崎久弥コレクション(請求番号 尾21-13)  
(6) 寄留は、明治四年(一八七二)の戸籍法に規定された制度。本籍以外の一定の場所において、九十日以上住所または居所をもつこと。昭和二十七年(一九五二)住民登録法施行法の制定にともない廃止。

(7) **伊藤小文司** 一八四八〜一九一八 岡崎連尺町の本文書店の二代目。名古屋の本屋井筒屋皓月堂の佐藤文助の子。幼名は代三郎。慶応三年(一八六七)二十歳の頃、本文伊藤家の養子となり名を小文司と改めた。父の佐藤文助は吉田(現豊橋市)の羽田八幡宮文庫の創設に参加したり、出版にも力を入れ、各種塵劫記、「尾張名家誌」などを刊行した。本文書店の初代伊藤文吉(文造ともいう)は上和田村の生まれ、江戸に出てさまざまな奉公の後三河屋という本屋に奉公、貸本の修業をし天保年間頃に帰郷。はじめ伝馬町、間も

なく連尺町に店を構え本屋文吉として東海道の名を知られるに至った。小文司は屋号に環翠堂の名も使い出版事業にも力を入れた。明治七年（一八七四）、「内国略指図」を手はじめに修身・地理などの教科書や参考書・習字帖・詩歌狂俳集・宗教書・教育書など多種にわたる出版物は約百点百数十冊に及ぶ。これらの出版は、当地方の学者・文化人の協力を得ての事業であった。とくに明治十六年に出版した「韻字四聲熟語訓解 環翠玉篇大成」は、内田不賢の編になる紙数四七三丁の大冊辞書で、好評を博し版を重ね、全国に販路を広げた。また、自らも「額田郡地理誌」を著し、愛知県小学校教科書販売組合副会長をつとめた。さらに、岡崎市議会議員、岡崎商業会議所議員などもつとめ、広い識見と卓越した進歩性を発揮し、この地方の産業・文化の発展に寄与した。とくに東海道線敷設にあたっては、駅を町の中心に誘致するのに力をそそいだが実現出来なかったため、岡崎駅と町の中心を結ぶ馬車鉄道を発案し、さまざまな困難をのりこえて実現させた。しかし環翠堂の出版物はほとんどが木版印刷であり、明治後半期の活版印刷の発展、教科書国定制度の決定などの状況のもとで、出版からは遠ざかり、新刊書小売業専門に向かった。店には常に師範学校や岡崎中学の生徒たちが出入りし、当時の岡崎の文化センター的役割を果たしていたという。大正七年（一九一八）没、七十一歳。（3-1160）『新編岡崎市史総集編』平成五年刊より）

(8) 本書の内容は、落語、都々逸、狂歌、狂句と、明治期の新題和歌（入・勉強・学校・小学校など）百四十四首を収めたもの。全七十八頁。

(9) 国会図書館マイクロフィルム（特35-191）

(10) 本町は現在の豊橋市新本町・札木町辺りで、東海道沿いの札木町、中京銀行前の交差点辺りにバス停の名が残っている。

(11) 国会デジタルコレクション（<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1029591>）参照。

(12) 三盟社書店（東京都下谷区三ノ輪町二六）発行の佐藤緑葉編『はうた集』（昭和十年九月十版発行）が残る。発行者は天野喜子三郎。三盟社の社名、所在地及び発行者が異なるが、後継であれば、三盟社は昭和十年までは続いたようである。

(13) 『尾張狂俳の研究』（勉誠出版 二〇〇八年）第三章第一章「水の音」「狂俳」「自由塔」と「樽流」三一―三頁。なお、三一―三頁後ろから二行目で、「清原集」を十一月創刊と記載するが、十月と訂正する。

(14) 『清警桑弧集』については「東京 桑弧社のめざした『清警冠句』」〔社会とマネジメント〕第六巻第二号 椋山女学園大学現代マネジメント学部 平成二十一年）・「明治期の俳文芸意識の魁―東京『清警冠句』と狂俳―」〔東海近世〕第十八号 東海近世文学会 平成二十一年）で考察した。

#### 付記

巴太郎の居所調査に際し、ご協力いただきました五万石藤見屋三代目主人西山育男氏、岡崎市図書館、豊橋市図書館には深謝申し上げます。

本稿は、東海近世文学会 平成二十九年十月例会での研究発表をもとにしています。席上では貴重なご教示をいただき深謝申し上げます。そして、椋山女学園大学 平成三十年度学園研究費（B）の成果の一部です。

\* 生活科学部 生活環境デザイン学科